



序

竹亭の作乃とよみ其いとを
やもふ系祗式れとけをるるを
千梅の篋絶輪子もよきふく
縁解る果ハ此日休ことまじ人の
心志のまじもなる侍る事乃多の
さ法を浪弄石橋隣りるもの眼
可たやのめとてふとて



Handwritten ink scribbles and characters on the right page, including a large character resembling '心' (heart) and other illegible marks.

歯たしよりいふ所ありて我試みる
家不族く系に助忽み口の道に
入半とらと得一人又少くも
さるく彼系切歯乃撰法新
序く大まこのれつけの同
来由諸説を俗称も取用申
詠諧下まの假初乃あふ志
まといしとも

師説の愚業をわすれし時
答へ侍りしをいふ筆跡あり
少めの一冊をこれに接し
ぬを殘しはる戸はくはる
毎の字ふしを採し標題を
世へく傳へよめいあふも
されはかといはれ係切歯
切まふはむしる歯の免

号むを伍中と式とあつてあまの
有徳乃人なつてハを備へる事也
まげそめお社なの外ハ見せし
ると言葉法尻かこじまひ
終ふもあに無一侍り也

江戸祇談林七世

一陽井素外

天明三年癸卯春

誹諧齒かぬ免

春之部

正月

三物連歌 同誹諧并引附

或書いし(京師)て連歌宗匠家小つ人聚り作せ
才三をて写印行して遠るる近世誹諧也連歌
流傳の三つ物と高聲小呼也亦吟次巖経浜眼紹巴
年篋小北野まで元日の発句して加へるに或は祭句
出来て於明々をきとけは神前を服才三并附て
ゆきよはあま三つ物連歌のけ是と我愚業又引附と

いふ事ハ歳旦三つ物組合の何と組合を引附一衣中此
歳旦と並(ま)りや元禄宝永の頃の年旦帳を見ゆ(し)
引附ハ部と多(く)り今お任せて歳旦集と引附と唱(な)ふハ
非(た)らん又引附の文字庭訓往来に出(で)ず是(こ)ノ目録(めい)
おもひきふ見え侍(ま)るナリ

門の神棚

櫛般石間戸命豊般石間戸と奉(た)げ三神ハ
天照太神天般戸とせむし時又還(ま)り入(い)せぬやういと
岩戸と守(ま)りし神也伊勢山田にて家々除夜小忌と飾(か)
もちひか(り)供(た)りて其夜丸納(ま)り也愚案是年始(は)り戸の
三

出入(い)り出(で)るのなを系師浪花まハ今此事は在(あ)り方(か)ま(り)ハ稀(ま)
有(あ)りし又禮記月令集説曰(い)戸者人所出(い)り合(あ)ひ有(あ)り神此神是陽
氣在(あ)り内(うち)春陽氣出(い)り故(ゆ)に祀(まつ)之(を)今世門まハ松竹まつたけと飾(か)葉は盒子はこにて
雑(ま)煮(ま)を供(た)りし戸の神と奉(た)り也といふ

かんと祝(い)ふ

えんげー太(お)著(しよ)と云

いんとハ一(ひと)祝(い)むん

又寒(か)也(なり)云(い)師(し)説(せ)ハ雑(ま)煮(ま)の事(こと)也(なり)古(いにしへ)丸(まる)簾(すだ)展(ひ)美(み)の字(な)りし
阿(あ)河(が)もの祝(い)ふと云(い)也(なり)愚(ぐ)案(あん)或(ある)冊(ま)子(こ)かハ芋(いも)大(お)根(ね)餅(もち)たり也(なり)
荳(ま)豆(ま)又(また)字(な)彙(ゑい)美(み)ハ五(ご)味(み)の和(わ)むと有(あ)りしハ雑(ま)煮(ま)五(ご)種(しゆ)も
有(あ)りし也(なり)又(また)江(え)戸(ご)ハ吉(きち)原(げん)の廓(がく)に残(のこ)りて今(いま)もかんと祝(い)ふと云(い)也(なり)

蓬莱祝の

蓬莱飾の

蓬莱の組付

蓬莱の発句昔八組飾又祝乃詞とむまひ又八組付乃
ふといひ或ハ春季とまりふ入てせ也愚案元禄の
頃とて蓬莱と乃白作才とて今ハ只蓬莱島の句受
申し侍也初学の人心得ある句をい

に一肴

一祝辛螺又肴一肴組飾也ともいふ
いしりの発句を見察似一又西ハ縁語とせり其品定の
なら原祝ハ舟人也愚案鴨長明四季物語十二月の事
歯取由ハ菜といふはし豆がどの魚あらぬと決まらぬ

四

下にきて下略 又正月の飾とよめる戲款

むらさきとさくら小とあそらかど葉の敷の事もあそ
らもあそみんハ鯉の事也今世都會也ハ正月の祝ひ正月
とまて北國也又近江の山家などハ鯉節の如く常此祝儀
もあそむるものともあるはあそむる内俗二月と三月四月と五月
と六月と七月と八月と九月と十月と十一月と十二月と
敷の子とあそむる親けりもあそむるに祝ひ不用いぬ
三方形はし一紙いあにあしはし
田舎くまや中のみく干魚乃俵と祝ひ申すえらる

飛馬始 糸切齒^ニのめげめ馬糸^ヲのめ曆^ハの初^メの事^ト并^ニ愚案^ニのめはしめの年^ハ土部^ノ又^ト部家の秘説と
あはし津^ハ傳^ヘと受^テるもの初^メきふ^ル原^ハ但^ニ飛馬始^ノの文字^ハ
其^ノ時^ハる糸^ハ初^メの句^ト世^ニ作^レ例^トもあま^ハく^ハか^ハし^キは
先^ニ年^ハ天和^ノの頃^ハ曆^ヲと見^テ付^リし^テ頭^書の曆^日凡^レ例^トとて
悉^ク下^ノ段^ノの注^解有^リ其^レ注^ニのめげめと^ハる^ハ糸^ハ并^ニる^ハ年^也と
祀^サり勿^レ偏^ニ別^ニふる糸^ハ初^メは^シ其^レ後^ハ曆^学の識^者お^もつ^トて
竹^ノ重^一年^ハ何^レと^モ多^ク不^レ畧^スて

毬^ノ寺^ニて^ハ何^レと^モぶ^レつ^トく^ハ玉^ノ也

顯昭^{中抄}云^テ節^録黃^帝取^テ虫^尤頭^毬之^取眼^射之^云
又^云毬^杖是^也以^レ彼^例漢^土年^始用^件事^國中^無凶^事云^レ仍^レ
日本^國学^其例^年始^也毬^杖然^則毬^杖玉^尅春^子云^也い^レ今^レ
京^師初^春弄^ふ毬^也毬^杖と^云ハ^瓜と^六角^小制^と如^也
その^と本^を製^製松^竹な^と画^き彩^々と^施車^と二^つ附^て
引^越し^る物^也其^車と^なり^て打^を玉^とと^云彼^車越^らち
物^とと^等戸^板な^と持^出て^留と^と戲^とと^世諺^同答^彼眼^の
中^の人^見と^ぬき^て木^丁の^玉と^て打^車お^せる^と上^下略^い虫^{天文}
年^中の^作て^用板^八寛^文三^年也^重入^本と^今の^玉と^云と^云
或^云毬^杖と^ぬき^てハ^別也^今故^ハ毬^杖と^云也^竟の^時擊^壊

老人太平の教と作して汎く壞へ投て戯とて之を物也形
全くぬるしく也いふと我之傳りてあつた壞と法ら
くまを訓を傳へ非なる劉向別錄蹴鞠黃帝所造本兵執
練武士也又打毬拍毬擊毬較年九廿といふ半はる音禁庭
也て此毬はつゝ絶つと享保年中とる故有て東都武家方
を其術をなす杖の先を曲て毬を此如く毬と馬場乃中
りふふ重三騎五騎斤の毬也系遠之彼杖とて毬をまふ
毬也互ふまふいふ世也又歩手毬有順和名公羊
傳注云蹴鞠以足逆踏也唐韻云打毬毛丸打者也辨色立
成云骨樞打毬曲杖也枕草子春曙抄頭書蹴鞠はよはは乃

鞠也打毬はよははの類也有愚案何意の季あひてはよは
はくと云各目形(まき)右ふし歩打毬はるんをいふ一は
毬杖とて杖とて世といひの以よはは毬乃製もかきり
よして歩手と名づる一也於可尋夫木ニ慈鎮

秋乃縮のおさほまる世れらるるきふまのむのれまる
小らほて是毬と小らぬ又蹴鞠も近日の時とてまると
まはものなる教

友とのあまのりあはれまふれ

まらふもむらふかるとぬらふ

長崎画踏

四日とて八日まで

不角清鑑西玉方より

切支丹佛を画きて踏まると也正月十六日とてはまること遠
近となく歩行ゆ多三月ともかる也但吹流とては朝の
人申もふも是ハ雜也津富西行の時此佛像を多く
其まは皆死刑の形と誹物ととる也望ふの箱ふ入れて
踏むと正月四日とて始り七日とて長崎町とてふも八日
丸山町とてふも也夫とては方一りからて隣玉とめくる在
方ハ各屋敷某とてふもとを役人附添其作いふも
不敬ふ素足とてふも法也老若男女となく未廿廿法は
此時互ふんはひて縁後とては法はけと成とて後とては
とて我もくと員乗とては也其年の九月までとて
法と改後と十月より寄奉行所とておきと法也
但一國一城との地ハ隔年にあつたためると也

猿引

法と出見常も有るもの猿引ハ春と

まハハ雜と心づくる人も有る今席とて争論も有る
や猿まはとてはひても春也他の承ふせハ其承子とては
通とて正月五日内侍所御庭とて法と針との義有
千壽万歳猿舞ハ清涼殿西の御庭に有是町と不
有る所の万歳猿引の義ハ非は筆一かたけきハ略と

鬼木

江戸武家方より八松と云ふおきぬ迄へ鬼木とて
材は新小黒並めて十二搦の助と引まきとつて戸を但里の世ハ
十三助むく也愚案浄土新小灯は元と混せり也又本
灯杖の歌の家

みりは本小灯は元と扱へるふちう八君うためると云
いそらむ灯杖ハ精魅と逆邪氣とほふ杯あき見は依て
鬼木と云ふ又雲の筋とむくハ灯杖ハ女薩と巻とならハ
其形也や於考漁

居籠

九日夜 十日恵比須

橋別西宮乃一村

此夜蛭見乃神の遊行志ありて七日に納る相と
再び軒へ送さぬふり一表と孤遠を田の家へ燈を細め
怯る居也社も街燈はしと我寅刻ふもて社壇氏屋
少も小神燈を懸一田と云ふ拂いてと示後計日ハ乃
紙の付衣小葩葉と入又大判小判丁銀の形俵袂提杯
さうの物とも小さく作らるるて賣又兼竹と云ふ其の
竹小右乃ふりて結付去る座とさる也

大坂の南今宮十日忍ひをも當日南小物右の如く又皆燈と
買ふ事と吉例ともるもの多し是ハ前日とると手指有て夜
通一おひじく群集を意比次ハ耳をくまきと云ふなら

けりて求めたる槌を社乃うららと打声ふるまのまゝ
くゞゞ其音遠くふ風をきて雷鳴如し

削掛 十四日

江戸にてハ一統さまとつ戸削掛の柳の
枝を削りて木の如く縷の如くせしもの也京大坂も或はハ
稀く有将正月諸も削掛の名目有年中故事要言
足濃國泳宮の村に正月十五日右の削掛と製女と
寺で大の男十三人といふは男子と産祝語成ハよまきハ
粥杖の遺風をいふ京都歳時記云冊子に祇園削掛
神事除夜ふ此ころころのきりや八九寸計の木を削りて
十

さまと削掛といひて人の耳送り事といひのちまゝに夜半
ころころ人のつと放き歩くる年の名残も今宵かろと
思へるみや更に防く人もはと有今もけおかま後の人
雑言といひのちるまとあまきと木とてつとあまきハ
或は祇園を修むハ洋殿の檻内削掛の木と立丸
右六宅見十二月の教を表を但夕杖と賞するは執行
径呪を誦同時小燎此火とて元朝の神供を調ふ系
後の者も火縄ふくしゆま家々と羨美と考ふ也ハ削掛
神事ハ元朝也於委々ハ予り花書神款行事解ニ紀
並り又江戸の削掛ハ事文類取登曰今列里風俗望音祭門先

以揚柳枝挿門隨揚柳枝所指仍以酒脯飲食及豆粥挿箸而
祭之荆楚歲時記 愚案此例とは異なる也又今世加賀戊辰
卯杖とて一尺のまゝの木小日花蔓をほらひておき外杖ハ柳
皮も製衣をとなまは割掛縷の如くなるお右の蔓乃を意にて
江戸の削掛も外杖にあはれ可考又風虎子集夜錦
香よほりマよほりさらめとのけつ里花 不醒
古今集物の名乃本款取の句也是を削掛との说有識者不伺

獅子頭神事

法三十四日とて十六日と今十五日と十七日まで

清江津中といふ或は住勢山田市中牛頭今村六杜

苗根箕社友社世木社とて七所の氏神乃社各がら有内
六頭少也民俗是を神体と見えと性古を麻鬼とらひ
とて年々箕を合せて獅子頭の形を似せ祭礼をぬハ焼
捨しや也其後是を本を彫彩色を施してとて數百
年を経まハ事實不詳今も祭終りて太刀をぬき獅子
頭を切拂ふ例も又け時積木大炬火と云ものあり炬火を
神事ハ属流る木ハ燎竹の類也とせ今日祭ある所乃
氏子必熟醉飲可く狂躍戲言と津とて他必の
人見て甚あやめると也篋徒輪外宮清神なること
出せハ非也

藪入 十六日 六餅 宿下り 今八日不定京西陣の
織人ハ今も十日十六日小藪入也六餅ハ大和老也
嫁カシする女正月はじめて親里へ由く時餅茶と稗米とを
四分六分小雜割世餅と去聲とよむ也京大坂とも奴
婢不限る次春秋のもの由くと藪入と云位で表長ハ入る
文字の從有愚案江戸で宿下りといふ者全上方の
奴婢の藪入也宿下り雜世訖書もあきと平日宿へ
ゆくを宿下りといふに損軒ハ藪入と宿下りの横化ハ
魚もといふ季とせハ宿下りハ三春小ころるとよむキ
多の二月三月也又云あねと秋もある也

菰草

いつきの季寄みおねと三春小ころるとも通用
せり愚案通俗志ニ菰草と云ふ云雜菜後菜も菰と
そのハ云也とあきハおねと出で菰草なる向なるハ春小ねへき
を但藥草百草ハ菰とて傳々也是ハ名目までさるる也

三月

阿蘭陀下る 長寄出島を交ふる亦乃カビタン
外科書記三人京大坂を経て例年二月末江戸总本石町
長崎屋方不遠南は法の式淋て後三月初旬發足する也

手拈燈春三月の部ニ紅毛と云るは日本一入洋十の事也
と云るハ非也長崎一入洋ハ六月出船ハ九月十五日也

櫻田 法説櫻の多き事也此山櫻と云へ也通俗志ニ
櫻田ハ櫻の多きと云説如何と有師の傳ふる事也

葉櫻 葉柳 けあ品春季ふおまハ通俗志其後
清艶又手拈燈ニ云るは中古と云る葉櫻と云へたの故ハ
猶と心得也夏の句ふ作まると櫻ハ種類多し早ふ葉櫻
ハと説櫻ハ葉櫻と葉と和訓通ふらなる事普賢像ハ

花の中と云ふは葉櫻ハ象鼻出歯の事也此電ハ化堂
葉と雜マてはてよと云ふ也其外葉ハ雜マてはてハ
皆葉櫻といふ也委くハ怡顔齋櫻品ニ云る系切齒ニも
け事并ニ云傳まるとを來晋子志流と云ふは流礎也題
セ云通俗志を雜して雜と斗ふ事也葉櫻葉柳夏也
丹波系耳也とて才磨并支流を詰^{ナシ}上云るハ唯本
才磨ハ尚流中奥の祖也始め貞徳の高才西武ハ字ハ
貞つの秘説を傳へ後尚流ハ親一と西雀のつふハ和漢の文才
其項並ふ^ハき流士稀好^ハと云へせ都靈山ハ都の判者と
聚め今も卷既乃登句ふ

一抓之何不とあるんはくくの字

才磨

磨う自譎甚一といふも衆人まきを由まて又言水撰東日記の序才磨ふて筆者其角也此集枕書月の句に有嵐雪其代衣ふも磨う句多く入集せる通俗志の兒島員九の作也嚏草をもひし諸書法説ふるをて此世事凡例不るへり紫櫻の事ハ右ふ弁せし如に於てなり粟

花さうハ昔よ尾上の畚おろし

其角

やまゝい鼓後の紫はくろ

才磨

此服も雅あゝハ晋子も印行ハきほりき也葉柳是亦三月ハおせるハ柳ハ芽をさる事法木ハ先ハ

柳とよふきやなういしたる乃風

宗祇

又詩梅柳度江春と作れりもまは既不用これ時又歌柳櫻をさきませてとよめるハ其盛ふて青白の父をも出せしある人連歌も

本川紫のいやかひ志ゆしつ柳

宗因

見浮生の紫柳也木の若紫初て夏なまるとも柳も花も若紫といふはまふ青柳あるのみ也右の書紫櫻紫柳の春ハ合黙由り次とほり合黙さるとハかて人のゆき事乃遠いころを告むる詞也是ハ其取謂を知らぬ也尊通俗志非戀の部也壻とハ我夫をささふ阿くは白男姑と云詞也

他ハ法派ともふ夏也又通俗志其度も誤り多
かるゆゑ一紅さむ人ハ我友也とあるハ員九ハ辞讓謙退の
文也さるゝとかく紅さむ我友才磨う友也とハ庶相子方いつま
みても右の作者の才分ハるゝ高玉極也其人ともさるゝ
其事實をも委くせしむる撰小筆さるゝハ己をさるゝ
さるとやいふ心私うりき事とも也け人の著せし標題
まても難せハ難さを事少るはうけまといふ人の短を
いふ才なけむハ見る人共さるゝ人き也

尚齒會

耳順以上の老人集に宴を齡を尚む

今也近來時々能向ふ尺田春季不元又ま云季とも定め
かゝるといふ人有古今著聞集唐の舎昌五年二月廿一日
白樂天履道坊ありてけりて行ひ多ひけ我朝ハ
貞觀十九年三月十八日大納言年名郷小野の山庄ありて
始めて行ふ事さるゝ又安和二年三月十三日大納言在衡卿
栗田山庄ありて行ふ事さるゝ天承元年三月廿二日大納言
宗忠郷白河の山庄ありて行ふ事さるゝ七叟の筭三管為康
年八十三 前丸尾佐茂系基俊七十六 前日向守中原廣俊七十
高亨主七十一 式部太捕茂系敦光朝臣六十九 右大弁實光六十三
式部少捕茂系時登六十二 以上中基俊ハ病ありて詩をうと

物上けり中畧昔ハ此産を盃扱つて或ハ詩を流く
或ハ管絃と命して公ふまかで遊戯する今昔かやらの
事も後める口惜きは愚案和漢の例春也まふとらる
可ぬる魚——又承安二年清輔白河にて行を遂し三月十九日

夏之部

四月

藪椿 諸書四月ハ漢名實の思きを女貞赤きを
冬青和名を椿又思かねもら氣もらともいほく乃
事也糸切齒委く思案今も昔も藪椿と春ふせ

句んえ侍る也藪の中乃椿なるし是ハ藪の様ときへき

志のね ぎしく此志の二名ふ世季案も何と通俗志ハ
別ふむらと愚案五銭内の俗きしくハ志のそと志乃ね
とハ四月竹條の根を生ふる芽の事也和名抄長間筆中
むせる拍形筆ふ似て味く劣き且但筆よりあふむ也

約志のふ 志乃草説く多し和名抄ハ垣衣の文字を
出屯垣衣ハ石ふ生ふる苔也ともんえらと和漢三才圖彙ハ
瓦松を志のふ草ふ何と又思ふ草ハ一系二名の説有

續古今

忘るも志のあもあれはた乃水増のまはるる我
はくけき外もよみたる兼載云檢の葉小似ると
馬奴草と云一つ葉小似ると云これ草とあふ也と
草の形と尋ね究めて詮ぬ只二草二名也外分は
並下と稱記撰也ハ兼載の考ふふとある二物よて事
足つるに似ると云一つ葉小似ると云ふ附く又物産家乃
説有略也今こまこれ草のこゝて夏也萱草と云す
和名抄にも只こまこれ草と斗ハ雜也志のふ草こまこれ草
やふ師伝る家小略と又志のふ草と抄するま草此葉

まる有也と云説有從可尋近來釣魚ふとて凡蘭の如く
朝小釣く夏日の眼と厭む是檢の葉小似て通俗を
愚ふ也損軒云澤名石長生あるんを愚案鳳尾かんとう
草とこね草なると見ふも似あう一ふ阿ふ物産説く也
いつ生釣志のふハ越喜夏ふとて可なる(きと)

修鳥

徳元初學抄にける啼て蚊を生けるなる

近來附句あも又伝る家爰ふまを和漢三才圖彙に
鴨鳩ハトリ二月とるまて五月の頃まで啼數ををゆ
穀物の種と下を也中五とハ豆まきとゆゆ也愚案

栴とる卯月ふなきは神山乃なるの葉かたもとの
葉も如賀茂に外神社小拍乃葉はく供侍と備ふる事
阿比北野の四月晦日青柏の清供とて献する也日一以
ほひの葉は是ふたよりして民俗製はく神に供し是るとも
祝をぬや又續新譜記屈原の靈歐回謂て云ぬある
取の拍今とるは棟の葉とて包と五線の糸を結ひ
此二物の蛟龍の恐る不也といふとあるは粽ハ棟子も
包ととるを拍と包むも外小拍あるもや拍可尋
林羅山子の句とていひ傳ふるふ
もれぬ乃とるもとる拍解

又雑談集ふかした餅の事と

餅はくはなるらのむら葉とす合せ 其角
かくいみしとる句もせしる

黒と一 白と一 子提灯の注沖のまげあはく曇
まはると白くくもると白とと有尚源推本家の
説いたふはくは曇アと吹西風とまはくと吹晴と東風と
白とと白とふハ船趕風の文字あるへしとるま
子提灯ハ延享年中乃木板を緊通俗志と挿しと
まふ江戸の事を加しもの也但注ハ誤多き也

清田扇 伊勢兩宮清田植ふ扇也此廿八日と

あまとい日不定也先廿一日ふし未統何とて便多のうへ
長官の指忌めて定る多く廿八日有尚日長官並
十の祢宜清田上の山ふむて祝詞有又大物忌の父達後
有て食膳何と其後清子等見ふ附添田の畔に
植ふ式有神樂役人八田上天水の社と云由き鞆吹て
夫とると待あま也分一番朱の棒と立侍烏帽子不被
扱扱の帷子と忌と次ふ大扇五本忌と持もの各急はふ
素袍の上とると忌と神樂役人鞆吹く(雜)神歌祝ふ
扱扱不入也ふくは小扇と指骨八拾とて山裝て重く清本社

松竹雀亀其外まて祭は也今日淋て此扇とまことと
形ひいふくい風ふぬまハ粒とまぬうま又田圃とあけハ
豊作とる也也わくかせ輪糸切歯と説区とまハ節の
行事解二記一居る趣を爰に抄傳る但右ハ外宮乃
式也内宮ハ長官の庭とて清田植の式何とて

住吉清田 廿八日 扱伝本本社南の方ふ清供田何と

此日泉列大津とる田樂法師とる鷲脚に糸田樂と
かき植女八日必知守とるあまて住吉ハ六十人あるは今ハ
六人又年にとると二三人もあまて右遊女前夜とるお供

當日已刻るるとして河田小なる其さる市女並の大きなるに
崩黄乃落衣を忘る社勢の家士先添河田を廻る也
早黄式流て當日神領の百姓小極さむ又社僧甲田と書し
従者棒とある是八田極小神代の例るは神事此終小
我ふは心をなして引かへ八和泉河内も住吉乃領内
る一右の神役をも勤るは但むる一極女として遊女大勢
かとなき八子流る苗とよしふや今八其義那

六月

富士詣

一日とて廿日と

同垢離

當山後同大明神ハ

廿二

木花岡耶姬命也秋とる雪阿るとして月登山を登はふ
四道有八駿河八遠江八伊豆八甲斐八林麻に各行人
止宿の家有是を坊と云登山穴昼坊をきて其夜明ふ及て
山上ふむる凡行程九里なる八三二里ハ大木生茂なり夫とる
上ハ草木水也山石峻しく踏む不安く次た右とる時ハ
眩めく心地を故小只足もとのを見る是是と登山に堪は
よて夜半とる登り曙絶頂小至る也土人坂のからる石を
積て室を構一雪水を煮て茶を煮て六間小竹條小屋と云登る
者凡烈の時ハあきふ入て凌ぎ又糶等の扱と食を山上灵社
霊地多し絶頂小池有めると凡二里余池中常小煙糸有

富士山上詣又禪定と云登山坂路の外小砂石の道有下向
小石を下流小行人草鞋を從横小足をきて砂の上をまへり
くく休まんと思ふ時杖を砂に立て止まる其走半流水の
如く九九里の道と二時をうりにて林無小到る又山の腰を圓
まて登は乃ち是を横行道又横山上と云難所なるれ共
坂道小倍と也

江戸駒込又淺草に淺間の社有六月朔日未詣群集を是を
宮里詣と云當日麦菜細工の蛇と紫竹の枝小はくひくうは
又色糸をまきし細小時の菓と入て南近半牛也水稻荷
ふも不尽山の形を築て秋日詣也愚案不足詣の句押出

て八富士登山の句と成し初学の人を得あるべき也

西園寺教妙音菩薩講 誹諧新式二十五日と云今十六日

又十九日と云或云西園寺家にてけ日妙音天の像前小
珍菜を供し祭らる堂上方并樂人集り管弦有琵琶
を好まると云ハ外も何と云と也又

妙音講手提灯十月十日と云注る略と云或云妙音講
と云八園東の在くにある事也積塔納涼の節さる者共この
溝をふり其所くに坐上といふ是ハ世友の言と支配する
者也右坐上の方(等)集り會を檢校勾當其國にあまハ

此の如く席をたて祭所中妙音菩薩左右天神舟方天也
日不定大体十月九日又相忍迎めてハ亥の日也云愚案右
の板ちまきハ盲人聚會の意ならハ冬小九きを尤西
よりハき一定のころもなきよし也

津島祭

十四日十五日

芦の神輿

尾及海部郡津島

牛頭天王祭礼也神輿十三日津敷にハ津山車并ニ車樂と
いふものと云て舟祭なり也十四日の夜ハ信樂の車樂五輛天王川と
いふ舟のうふまねをたて大提灯三百六十箇其外提燈
燈籠籠救くを並一舞童樂と送津島竹田の祓曲となす

廿四

十五日の朝車樂山車追々舟までとらむ人衆と飾小袖と
幕と鉦太鼓とをて囃ま人形何まで働き有就中鉄炮を
放と仕つけあるハ故ある事とて天正年中とて定む例也と
い神事不付國君とると田圃を寄せらハ外ハ年毎の下とれお
り至りての大祭礼也祭の起出日の式委しく行幸解記より
芦の神輿乃事今ハさうと云て唱ふ先十日木曾川をち
神主山と云所を侍蒞と刈初まると川下海辺まで小舩
三艘小川入其日津敷不積至十二日に是を揃へて五把とて
但上荷三下荷二と造る也斯せ上ハ本殿小川の幣を
挿とて十五日の夜丑刻社家巫女等舟とて天王川の橋れ

もとよりと流を終て橋のうへまで後ゆるぎ又采の坐といふ不
にて神樂を奏す右のこより流きあふふ不めてハ神酒
供物を備へ祝ひまつる義なるを七十五日を経て土中に納め
ちりしとち又ハ取にあふ承元倉と管は是と花蔭天王と崇
むるとは同國熟田も六月五日ふ此義はあふちりしハ池に
納むより此仕立祭事の趣ハちりしといふまじも厄神祭也

住吉浄核 世日小の時ハ廿九日 同火替 此日神輿

一基の宮乃前ふ浄近坐祝詞右未の刻北の浄門とちり
反橋とは浄鳥居の方とちり神幸社移代 并ニ巫女系輿

其外社家大勢馬上めて供奉又平野とちり志笑に白衣を
忌世見來りて門馬上めて供奉を是ハ昔平野乃連と云
者の末葉なるは安立町の南法基の末林といふ取乃石坐
めて整く神輿と安を是とちり塙方の受え也相宿院ふ
入浄神祭式終て還幸又右の石坐にて大坂方へうけ丸
ころの義有浄近の提燈武家商家とちり夥しくあふる
塙とちり提燈ハ此ふとちり是を火かといふ還浄並利ふ
及ふ也ちり船の事にもあふる者此神を信せるといふ凡
今日の娘い接河泉三國にちり別々大坂ハ産祇の祭祀の
如し新町太夫とちり外崎の内藤子等供物ある各義を尽せり

櫻麻 袖中抄に白ら麻とハ麻乃をハ白きハ并ふまに
淡菰拵父ある麻の白ら也まを櫻麻とハい也又下人乃
中作らうハららと云もの有とやきくら麻とハららと
いもの有まも布ハ織まハまも麻とハまもまもを
加くらら麻といふも或云櫻麻も麻の名形と様乃
時分ハ麻と時也隨葉云くら麻とハ麻の葉ハ赤きを
いそぎ師説櫻麻夏也櫻花ハ似ハ説用也増山井
ハも花の接ハ似ハ也とも但櫻麻のおとけけてハ雜也

沖繪

諸書出清色又提灯ニ注きハ沖めて得

たる魚と冬暑の時ハ調して食ハハ陸ハ好ると也
愚案右の注めてハ遊漢の事と云也江戸大坂めて
さる事もあるべきをなきとい唱ハハ後遠のけりめて
沖繪といハ漢人夏日沖ハ出て初ハの鯉と三四斗の
切刃とれハ和して昼食ハまと其是食物の類ハ雅き
時節をまハなるに事も其地ハ由來ハる高貴の方めて
彼沖繪乃ハいと食せしるハ潮とて塩梅なる物の
より好してある佳味也沖繪の名目他國にもあるまや
於尋ぬる

秋く部

七月

北野社壇煤掃 六日 同 浄手水 七日

諸を浄手水 六日 煤掃 七日と云 雍州府志 七月 宿外陣
ある所の煤を掃 七日の曉 松梅院 五人内を時又て
浄手水を 神寶の中 松風の 灰 乃上 穀の 祭とて
供て 七夕祭 乃 祭と 詠せらるる 為也 愚案 今も 松梅院の 如し
六日 外陣内陣の 掃除 辰刻 つけ 七日 巳刻 午後 つけ 日
未詣の 者と 内陣 申す 宝物 洋見せ 七日 八日 秘めて
松梅院の外 他ふ 者 式 浴て 香水 と 号 井筒子

入かぢの葉とに 高貴不奉 又信心の者 不いりま也

をふれ ことたふり 法を或を 織女を 牛也 七夕と 八日 愚案 季吟
才磨 増山井 八 詠題と 誹諧
物と 知し ため 此類 八 詠の 字と 添ふを 七夕 七夕
系 俗称也 といふ 乃 季 亦 あり 玉 字
斗 先輩の 句も 多く 見ゆ 七夕 祭の 事 八 詠
風流の上 まで 及び け 事

冷麥 ぬる麦 あつむら 蓮二の古今抄 冷麦
冷汁は二京家の式目小秋季小まゝの字に迷へる
みや下略 尚流ハ通俗志 冷麦ぬる麦 阿つ麦ハ秋汁ハ夏
實小秋と麦とおまハ索麩の事也 増山井 昔高辛氏の
小子七月七日小死と云其冥鬼と成て人小瘡病をまや
まてとせよの者小麥餅をくつ里其れ小死る日小つりて
索餅と祭ハ瘡病をまぬるに止す節也 有今索麩と
用するハ此遺法なるに止す又清明の説七日此索麩ハ巨旦の
節也と云是ハ惡鬼降伏の意を言今著聞集七月七日の
むきなハ房中小足はゆきよと云るを圖によめるは眼長真

いくなまはせよハ多うは麦ハ乃一房ふたふとぬ
かきんまなと云とさうめんの事也貞室撰玉海集
殊之部 桐葉小索麩をまぬる也
云々麦小秋を知る 桐乃一葉一のれ 徳窓
是冷乃字小なりて秋とまゝふらへて右の古事と起りて
古ト云る 初秋乃季とまゝる 成し又職人盡款合さうめなり
てらさいの古きものくはあつ麦れむあやのせと乃
月とるるんめ今世むや麦と唱するものハ索麩マあるは
切麦也通俗志ニ夏へつる部 新麦切麦汁は惡心案
麦ハ四月熟して其新と出 孰を水の粉とつた いがの事

寺ふもい法事有是ハ油紙を灯巻と制ハ艾公と云々ハ
塘波橋の迎身修を又曰所川口九島院もサ戸分橋
あけい事となま也

蓮乃飯 十五日 諸書おけ才魂の欠食也又

蓮めしとてを来者堂祝とるハ蓮の巻葉浮葉乃ちろを
刻して飯不知或ハかいて其香をういそと云思案是ハ
夏季ふれきれ尤句までしこから魚きなまこと蓮の飯
蓮飯を季とくしハ文字の上までハ端かつけれ昔朝ハ
詞の由也殊ハ俳諧ハ俗語を用はまハけ類の本奉也

かサハにひびく月草といハ一名となつ鴨踏草の事也又
月の草といハ句依ふと句て月夜の草ともす由也

流と入 十六日 惣列山田めて人の家ハ案内なく流と

入て中侍つる重器なども亦りて入る事也今ハ昔とて
點取不志とんねてせし句時ハえ侍也戀まハあハ次ハ
句化次才もて悲もはれ熱向あはしと燈灯不苞を指
来るとあるハ又誤なり

日まハアとの花 又日ぐるは 又日向葵

何まきの季まのし石む草のささ六七尺花の大き六七寸
頂上花の咲形状春菜の似たる朝の東小向ひて日と
とをためくる文菊の文字通用して自他とも秋を
又向日葵の漢名と用ひて甘菜とも流名し何の葉菜
六月ともも咲へば七月盛る八月とも咲也先師も
秋小とるも傳ふは流名秋とまじし

律の調

通俗志三秋とる部も吹草嚏草ハ
春季小呂の調をもとむ事物紀原黄帝命伶倫造律呂
聽鳳鳴以為十二律雄鳴六為律雌名六為呂連歌の説

管絃の事也呂ハ春律秋也又律ハ秋冬呂ハ春夏也且
可成談律の調と事律秋小用ゆるハ五調の内一越乃土用ハ
何とて除て残の四調もハ秋小ある平調而已律も外ハ
皆呂形なる也といハ誤也又ちの言る處と云ハ十二律の調と云
半也一切の物乃音秋ハ殊小きもゆる公も秋小用ゆるハ
呂と云半と秋小詠ハ也樂家の説雙調呂春又呂律
黄鐘呂夏 平調律秋 般涉律冬 壹越呂土用 愚案
詠造ハ先哲定めたる通呂律の律小にて秋小ハ但
呂の調と秋小よゆるハ詠ハ此調なるん勿論通俗志
もさすハ春の句とせむ事好てハとありまは

居角力 雑と秋よ端者師説居角力平句小出
秋と附し又秋二句續る亦なうへ三句めまききや但
題として発句小は世かか又奉角力の類ハ雑とせ

八月

八朔 たのむ祝 田乃実 縁雀 繪行器

けめ八田の実とて本と折交土谷なりと入て人のもと
はなしけるよめい半起まるは後院院まき着交て
御外戚通方郷の亭小法坐在時法閑素と願めり
とて近習の男女密くせりく其後如き小聖運り

繪一六御嘉陽也とて肉はは沙汰有る船と中傳りは
志事大やけるよめ八田めく有はま也以上公事根係畧文
説く有故事要言云京師浪花の俗時乃果餅をくま
もるカキタマ蔓草の蔓草と紙系るともは雀とはるを見とはけ
互小結て事のむとハハ也又或は京俗今日家くの乳母
とて其まふ下の女児ハ行急二双と後肉小柿并は茶を
もる飯のそれとハハ志んこ小赤小豆と懸くも也とハハ
と云又志事アの戲まに松をまき雑鳥賊の甲之語と
造りなうてお結り何ふ是を移るあひと云又民俗互小
薑と結りて笑候とて江戸をハハうやう此義は今日故阿

御吉例として方八年に於て是日也愚考系より繪行忌と
以六芝神明九月十一日とあり世日を有る生姜巾小商おの
おだい摠又ちぎと云物也但神事ハハハ禊坐の目まで十六日也
氏子體と制衣と右苗画の事として考合をハハハ田の突の
祝ふある也伊勢ハハハ日外宮乃新嘗會也又ハハハ生姜市乃
事と古沾涼江戸砂子云本朝医方傳姜去穢惡通神明
とありハハハ程の事とての例ハハハと右田の突の事大坂も
いハハハハハ今ハハハ義也

イケガハチ
放生 十五日十六日

山城丹山八幡宮より修行神祇也

世三

八月也水辺也生類越嫌放生川ハ各所也雜也非生さ連誹
門松の式也神事ハ十五日寅の一天ハ鳳輦小辻輿有て山下
頓之後ハ神幸也上卿参向并行列の式行事解委一
記ハ神事終て入寺佛堂司泚衣の衣と還返之後のあぬ
及屋の高空ハ登は其外社傍舞臺ハ在て宸勝王徑を
特渡放生會の式有旭雀法を放き凡午ハ刻也此ハ
去て還幸ハ酉刻ハ上卿其外供奉也神官社傍ハ
礼服と脱淨衣と還返白杖草鞋ハ山上に玉置本殿ハ
入也也十六日と放生供奉と云傍徒放生川の及屋ハ出
修行公の魚鳥と放其後志願の者乃魚鳥とも放也

梅高日儲る所の物残らぬ川に投ぎ又印佛と来詣のよふ
詠も愚案放せ余の幸も申根えぬ最勝之経巻者子流水
品の池魚乃申とる起まるよと向きハ始元佛説也今放る
と所急なと賣ハ雑とまれども是と求め放ると志願者
又ハ菩提のるよとまら幸なきハ神釈不越と可嫌を

夜蛤 八月の頃江戸まで夜と賣歩く也月入のあち
はあゝ蛤を吸揚 まる幸一つの際るたならしとあれど
余不れまほし貴のけや夜蛤 超彼
叶の坐某先師の獨吟の中ハ

蛤と林とおもハハ江戸をのり

蒼孤

通俗志す蛤春ふは是も賣時と以季と申師説夜蛤の
幸思ふ不らまハ押して林も定めぬ題と得ハ秋季と信て
は平句ハ居角力の捌きあやしく夜蛤ハ秋と附へ一又
三句めの秋ハ昔かほしくや連歌も三句めの季の扱と極く
せもんえらと我但右のす蛤と云ハ蛤も非を語なきやうの
物のむき身也又同云ハ蛤めると有ハ以干とて踏めりあるこ

冷ゆき月 今考をときはゆめを枕るま子にまじ地
師走の峯乃月とあるな也と我も愚案今流布の春曙抄ハ

けりぬ異本ある氣通俗志冷に袋枯野落葉其時を
野衝炭等結いても秋也と者是連歌の式也月は勿論也
もさし月又くは小友時多 素外
但おそろりきききあても林也とせ

九月

貴布祢祭 九日 換サ、コシ小輿 是、貴布祢の神社あり

ある祭事ありて上京迎りて小津妻とゆりて
あり也百六代後奈良院の御宇咳疫をりて小見祭を奉
懸一是貴布祢明神の崇まりは特士のトにありて弘治

二年九月九日けりて祭となると民俗ちやくに祭とあり

漆かく 是ハ漆の立木ハ裾の挽目と付垂てありき
脂を昆布をかきとるも也愚案今ハ漆を漆と木漆子入
日さしを漆又火おけて制衣とるを漆と書きし句時と見ゆ
右右の生漆をかきとるもハ句作格別不遠と各目小季の
沙汰有て故に漆と制衣とる句ならハ漆神とて御ん

露時雨 近來燕多ハ只秋の雨と心得せし句ハんえ
侍る也歎連声露時雨と詠り又秋の時多ハ御説

霜の時をいふ本草不區霜と風吹凍の時をいふの如く
はらりたるはらりたるをよそ風作植物小穀と奇嫌と也貞徳
法傘子似せ物の時をいふ後けて霜の時をいふ秋時雨の時をいふ冬
さきさきけ霜の時をいふ元祿の頃より霜の時をいふ一をいふ形して
御妻月ひまねと右云々如く元末霜の時をいふの名目をいふ
お振らんとし得て句作とくき也

露霜

是亦霜有露と書とよみ又いふ人の歎
霜と名ありていふる有師況其一名あり俗あり
霜と名ありていふる有師況其一名あり俗あり
霜と名ありていふる有師況其一名あり俗あり

凝露也又说文云早霜曰霜白霜曰皚和名抄霜執ハもしも
と有愚案羊肉小さく梅と早梅と云ふ思ハ早霜ハ秋
霜といふも白霜をいふも前ハ勿論霜降ハ九月の中也
さきさきけ霜といふも訓はさきさき也但云ハ霜といふ
と清也トものからず霜の一名有ものを知むもの
御妻ハ是と月いふる通霜霜と書ても句の上とくき也

枯尾花

連袂秋也を来冬と心得る人々

也もかくもかりてや雪乃枯尾花 芭蕉
愚業け白ハ枯尾花の枯も果して雪ハ何る観相をいふ

論は見とふはて撰次ハ冬乃句ハ

なまきううとふまふかくとやうま尾花

其角

漫石さめてゝ凍るまゑ

支考

晋子ハ師の亡骸と枯尾花ハ辟言論して秋のなまきうと見ふ時ハ
冬季自然ふまふなり後ハ支考枯る字とて蕉つハ冬季と
定めたる枯跡冬又各草枯るるは冬ハ一理方ハ似ゆ
されと云ふは花をむまハ秋也よて尾花枯ハ秋也
枯るハ冬也此も花を穂花むまハ秋也よて連次ハ秋也
詠詩も同様也と知る也

冬之部

十月

楮 柯^{カク} 杣^{ソウ}

楮ハ米の根也かくハ切株也つれハ山家ハ
焚て寒を凌ぐ助と云る也楮ハ連詠夜分也かくハ
まのふもの也其抄活も及ふは一きハ

鮫 鱧

漢名華脍魚又老波魚又後魚といは

冬の佳品也て今世江戸めてハ高貴者も奉るもの也されハ
和名抄小見えハ又いづれ乃冬季のもの也愚業河豚ハ
け魚のなまきハ枿泉の海不得る物なりハる

老海鼠

毛吹草冬季北江戶毎ても稀く魚市に
まこと名を知る者少し形ハ莢変ふ似て色赤くいづくは山岩
かなと云ふ生世物の如く又海鼠の老るると云ふ事尤亦有
皮と云て腸と食ま味いあるは待智名抄老海鼠俗
用保夜二字とあきハいぬハ専食サマヤ

沫雪

蓮二二派春也其外春ハ流氷何連放ふ
冬也或きゆハ去也通俗志沫雪初雪と云れ雪け分消る
残るを結いても冬也和名抄日本紀云沫雪其弱如水沫又
一説雪ハ何ハしきハ氷沫の字と冠じしるも云万葉

師をみハ沫雪と云ぬかもうぬるをねりく答めり
次いで尚流氷ハ連誹とも冬也と心得へま也

右いふも二三ふりしは

十一月

空也忌 十三日

鉢叩

紫雲山極樂院光勝寺浄土

専念宗也上人遷化ハ天禄三年九月十日也今日忌日とする
事取謂者但け日とハ十二月廿八日と四十八夜神叩修行毒殺
出番らりて其不取ハ丑刻と云諸方(別道)て系師の
七墓と云ふ事ハ不詣夜明方不詣也彼岸十夜忌月六

本堂より醒念佛と名を寺中十八之内年老の者別發
ちく僧衣と名其餘は有髮者妻帯者又古き繪本神印の
衣ハ各紋者是ハ元祖平定盛と名世袍と名法衣と名遠
風るるは今ハ昔と名衣也師老ハ十三日と名大ふくの茶釜
ふまほしのよみ茶せんと洛中と名歩行也又神印の寺と
空也寺と名句者空也寺ハ別也京極四條の南ハ有入
皆く位せ不也右光勝寺表つゝの額ハ空也堂と名傳記
等委く行事解ふと名せり

十二月

廿九

正月事始 十三日

或名禁庭めてハ今日と名万事乃

経管けめて修せると名京師の町と正月用ゆる示の物と買
たむる也又江戸ハ清煤也町とも多くは日小煤と拂事始ハ
八日事納ハ二月八日也始め納めると年の際ハ竹と付て空也
見と名事凡俗也年の管物ハ十七日十日淺草觀世と名乃
市と名御也外ハ市と名といふ日と市と唱也終折群集と名

うばら

京師の女は食也鬼貫搦と名朝日と名うらと名

いものちてつくふと名よのちと名海のきと名うらと名うらと名
ふも何と名とせりハ世と名下略今ハ廿日と名て廿五と名

止む所ふ白きも拭とありし赤糸岳をかけ小まじ荒と捨て
うづらつ後ハ志きと云

物よし年礼物

京師建仁寺町清明の辻子又東寺

下は塚けあふ小住居を瘵病の者あき布あふは終中とあり
まふ津より法籠みき野野の及のかく井の足付とる春負
おごし年礼ものとして家々ふ米とらふ也越る年北市乃商人
ものよしの札と貫ふ年也札なきものあふは体み物と云れ也

寶船 前分

京師よりけ夜内侍ふ米海へけ

四十

画といふきぬに其夜吉夢ある時を耳年福と得ると云
悪夢と云ふ時ハ流水小流もの交となす林裏より半
阿るよみ糸天神の社より宝船と赫と云さし中におほ
やけ半より何と云はし江戸までハ正月二日の夜是と画て枕ふ
およそ春季と云る句後思案何まの季まも前分
かき入春ふハ丸がうは但江戸の句ふ即てせハ格別ありん

大原雜唯寐 前分

言傳此辺の縁まとき男女

此夜産祇の洋殿小籠了夫婦のかういふと定は也但
常陸常筑摩宗ハ歌もよみて連歌ふし神祇也意也

さこぬの神祭りもあるされに説き冬季とまゝのまゝて其
沙汰は山列各跡志云大原物語云古代の昔京好
女若按の小濱不洗く位を彼者夫と恨む事ありていふ
遊む其水庭不洗と洗む彼其地とて時々里ふもく
人とれんとて其ふ暴る時昼夜とてかた男女は結ぶ其
臥てかた也是と大原のさこぬと云終ふ山門の法力と以彼
地と退治とて今毎歳正月小末迎院勝林院の信徒法事と
如里人集て勝林院乃天井不地の形と画て天井より白布
二三反むをひ下て男女さき小採付太鼓と唱て踊也
踊果て後件の布と切て今ふふ記也是則地と退治

事なまね也とて右八畧文也今世正月三日夜勝林院ま
護魔修行者村民とらと摺踊子まきさこぬの地也と云
白布の半八絶くる元又大原のま屋祇江文社の祭神倉稻魂
命也其かの夜昔就にといふ系不もて定かなるよし
愚案ささい藤の半いつまふもせよ古の事かひ他にむ
たはと詠句も地の方半通用仕うにさきまを仕するの通
以大原のまを藤と心得次第となく八神祇のさこぬと
操ふし乃ふゆきまきさこぬ

新宮の繪馬掛 卅日

諸虫の涯天王寺道公也

いふは汐つ慈野を望むるに日暮て樹下小宿画馬の足
損しるを糸を補ひくふ行疫神の眷属を祈り
半をのち羅山子神社考し此半の糸を伊勢とハ照子
と示宮の時斎宮の旧跡不詳不彼画馬の社の神殿不社司
不謂と記さる其文曰栢作勢の女不ハ画仁天皇乃
皇女倭姫命初てをせよハ壽五百歳ナリて岩が海を
駕社守瓶子谷氏の先祖ハ伊隨男の者ナリ其後北野
山不ハ行方志事ハ如ぬ半と経て白髪なる翁現来りて
子孫不告く曰我今五穀豊饒と守る神となすを是と
又て豊凶と志はいとて五穀負ぬ給ると殘けはる如く

らせぬ小殿を管に彼給ると納め年毎の大歳不何ふ
とやともしる所掛かるとるると書込入るふ吉凶遠く半如
下畧又画馬と云強者右の社説を傳人作せと入るると道公
画馬の半ハ糸之の給るとハ大不別也又と名論の記法人謂て
繪馬とかくと有内文山の神を居の糸をて采末と春ハ
かけるとれ繪ると常作勢近在と示指の者是とせとめく
其辺の本乃枝も居たとかく也此糸と混誤まするや
山乃神ハ大山祇の神と祭はとせ

傀儡師

をさしき新式を正月に出高流ハ春駒をひき
まハ一をとり名目とてまをさしき傀儡師ハ越名也都也

よのこの君

胤の美名也又春の脱決也とも云

明る夜のほのくらくまうよめこの君

其角

さしき句許六の編突ニ歳且三季の格不引れハ蕉門
をさしき難なるし又短冊をてり句不

とらさやかさうふさせは嫁の君

挑青

天和貞享の頃乃吟や見候をを結ひしハ冬の作也
愚安ホ風の訓不麻才なるは嫁のきとハ夜目の君也其の

唱の情さけさうねハ

後解不齒もうわくしよめの君

素外

又蕉つゝてハ三季の格難の格なといふ事支考許六并
と重ア師説いありと連詠も難乃句ハせぬ法也勿備稀不
先哲の句不んえ侍をて句中不不謂者事也せぬ法と心得
侍とて誤り也と定定を相火桶を制しよ事又えとる

富

通俗志いろはあの前二春也と有是ハ按別其西山

辨才天の富とけめ京と迎諸との富皆正月なりいさも
福の守とて愚案近世寺社修葺の助成とて富真行有

見ハ雜也ままの句の作意紛しけけき自今季此名目
なく富とハくハ雜ふ少るまきれ

墓糸

家ハ皆杖了白髪乃墓まいり

芭蕉

此句蕉門の式云三句不季ハ又えねと前云ニ季と譲り
正し件勢拍法ニやよひ晦日雨の後行る小春花と打てきす款
ぬまのいれおわおつれ平乃うらふまハいくもあし
と思ハけ意也愚案此題よてハ前云なりてハ雜と意ある也
増山井ニ墓糸の半爰再録と云く七月ニ季と批青其ハ人

四四

かまき石の款乃まきよし秋季不案なる也(出流ハ雜也)

雷園

雷園ハ何々ふる神のまきい

まきい萩乃風共よきころ

八月ハ旅おちろま小幅綿

蓮二の古今抄ニ是雷宮ふ月のまきい八月ハ旅おちろま
えりふ月なる也ハ八月ハ旅おちろまの字とまきい
せる半深見の句法と号并世也此句け痛とる甚つてハ
雷宮月とまきいもまきいといふ人後連効ハハ合字

五句夜ふなると宵言をばとらふ字ふ附さるるを又言夜の字に
二句月をぬ前と云なふ月三句嫌又曉闇のよめる

阿はの川曉やこのかるるまゝにたゞしめあはれ
ちら浪愚業又夕月の入たる後とも又言をこふめや

夕やとの月やなうららけ川 宗祇

又夕闇宵言やして面の月と持仕方有連歌の上の事おれハ
まふのせは芭蕉ハ赤子吟とてけい義持ハもまじり没後ハも考
文才不驕りして一か紙の武法とてけい自見の事後今世の人は
なく芭蕉と信せし却て私くもる事もあぬ也

凡そ歌の連歌不遊るものけいめいけいしきはまゝにまゝに

おのつらういひ学ひとて次才不志厚くならもてゆくも従ひ
深きを探るふいころとてハ彼宗和法師の不思議の教も
是せに深のまじりのきこわくもあふ者たは道中や
中魚うらんの

誹諧 齒加ふ免 終

生白菴木丹書

これ等ももて猶造る窺ひ志
後編を承きおしりきおしり

姘高津富書

天明三年癸卯夏

雞談窓藏板

